

防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業報告書【防災に関すること】

学校名「熊本県立東稜高等学校」

住所：熊本県熊本市東区小峯4丁目5番10号

電話：096-369-1008

I 学校の基本情報

○生徒数：1082人（27学級）
○職員数：95人
○過去の主な災害
昭和28年 熊本大水害
平成11年 台風18号による高潮被害
平成15年 集中豪雨による土砂災害
平成24年 熊本広域大水害
平成28年 熊本地震

期日	具体的な内容
11/28~30	先進地視察（静岡県）
12/2	マニュアルの中・韓国語への翻訳（国際コース）
12/5	先進地視察（北九州市）
12/12	第3回推進委員会
12/15	第4回学校運営協議会
1/23	防災教育（IV）
2/8	第5回学校運営協議会
3/3~4	東日本大震災メモリアルday 2017 参加

II 取組の概要

1 安全教育手法の開発・普及

(1) 学校防災教育年間指導計画

期日	具体的な内容
4/18	防災に関する科学研究（理数コース）
5/25	生徒防災委員会設置のための生徒議会
5/25	生徒防災委員会設立
6/16	大野俊三氏講演会
6/23	第1回推進委員会
6/29	第1回学校運営協議会
7/6	第1回避難訓練・防災教育（I）・オープンスクール
7/10	職員研修
7/20	防災をテーマにした小論文コンクール
7/26~28	先進地視察研修（兵庫県）
8/3~8	東北×熊本～復興の和プロジェクト～「HABATAKI」研修参加
8/9	地震火山子どもサマースクール参加
8/22	HUG（避難所運営ゲーム）研修参加
8/24~25	宮城県多賀城高校との交流会
8/30	第2回学校運営協議会
9/11	職員研修
9/15~16	京都府立東稜高校との交流会 人と未来防災センターでの研修
9/18~20	アクサユネスコ協会減災教育教員研修
9/25	生徒防災委員会（安全マップ作成）
9/26	第2回推進委員会
9/28	第2回避難訓練・防災教育（II）・オープンスクール
10/3~5	SPS等先進校視察（関東地区）
10/6	防災グッズアイデアコンテスト
10/12	防災をテーマにした小論文コンクール
11/14	P1チャレンジモニター実施
11/16	第3回学校運営協議会 第3回避難訓練・防災教育（III）・オープンスクール

14年後には熊本地震後に生まれた震災を知らない生徒が入学してくる。また被災状況の濃淡が大きいため防災意識の温度差も大きい。さらに「熊本の次はまた熊本」の可能性も高く、防災教育は喫緊の課題であり、かつ本校生は全国に進学していくため「東稜高校は内陸部に有り津波は関係ない」ではなく、総合的な防災リテラシーを身につける必要がある。一方学校は、震災のため1ヶ月間授業の中断を余儀なくされ、学力保障のための授業時数の確保、生徒の心のケアのための担任の時間確保が最優先されるべき状況にある。以上の実態を踏まえて、防災教育の継続性と日常化を重視して、ハード面とソフト面のバランスに留意しながら計画した。新しいことに極力手を広げず、今あるものを防災の視点から見直し、生徒ができる事は生徒が取り組みながら、自主性、責任感、行動力の育成と共に担任負担を減らし、授業時数削減をしない、持続可能なシステムとプログラムの開発を心掛けた。また本地震から間もないため、生徒の心のケアが最優先であることから、事前に教育や訓練内容を保護者へ通知して、実施時の配慮の有無を調査し、教育相談部、学年部と連携して、配慮を要する生徒を把握し、要配慮の生徒には担任が面談を行い、必要な措置をとった。生徒の心理面を十分に考慮して避難訓練・防災教育を実施した。

(2) 緊急地震速報受信システム等を利用した避難訓練の実施

11月16日に、学校運営協議委員、熊本市消防局、学校安全アドバイザーを含む4名の防災士、東区長をはじめとする熊本市東区役所、東稜高校のある山ノ内校区自治協議会、保護者などに、参加していただき実施した。また授業

時数確保のため、避難訓練と防災教育を毎回セットで地域、保護者に公開して行った。

第3回は、訓練開始時刻以外の内容を予告せずに、地震対処後、火災と地震による避難経路に制限をつけた避難訓練とした。これは教職員の緊急時の対応能力の向上を目的としたものであった。そのために重要な指揮命令系統となる管理職、防災主任は、事前に関係機関と打ち合わせを行いながら研修を重ねた。

被災状況の確認、避難指示、通報までの一連のスムーズな流れや生徒が真剣に取り組む姿勢が防災士から評価された。しかし一部に、指示の前に行動する生徒が見られたことや将棋倒し防止のため通路が狭い場所での歩行速度などの指摘もあった。

## 2 被災地支援を通じた体験型防災教育の推進

### (1) 避難所運営ゲーム

2年生生徒防災委員は、防災教育を中心とした実践的安全教育総合支援事業に係る研修会として8月22日に行われた避難所運営ゲーム研修に参加した。

他校と交流する事ができ、かつ福島大学の本多環特任教授の学術的知見に触れることができた貴重な研修の場であった。

### (2) 学校独自の取組

11月6日に、3年生全員を対象に、4名の防災士に指導していただきHUG研修を実施した。3年生生徒防災委員に事前研修を行い、かつ防災教育（Ⅰ）でクロスロードゲームを経験しており、多人数で、40分の実施時間ながら中身の濃い研修となった。

また生徒は、宮城県多賀城高校や京都府立東稜高校との交流や東北×熊本～復興の和プロジェクト～「HABATAKI」に参加した。

## 3 学校安全（防災）アドバイザーの活用

学校安全アドバイザーの活用期日・内容

期日	内容
8/22	安全マップ作成のための学校周辺の視察
9/11	職員研修（講話、防災マップ作成実習）
10/23	避難訓練及び防災教育（Ⅲ）打ち合わせ
10/30	3年生防災委員HUG事前研修
11/6	防災教育（Ⅲ）3年生HUG研修
12/15	第3回学校運営評議会

## Ⅲ 取組の成果と課題

### 1 安全教育手法の開発・普及

#### (1) 成果

ア 今年度から熊本県は、すべての県立学校を防災型コミュニティースクールに指定し、各校にその推進組織となる学校運営協議会を設置し、地域と連携した防災管理・防災教育の

充実を目指している。本校では、自治協議会から4名、区役所から3名、近隣の小学校長、医療関係者、PTA会長、消防、警察から1名ずつ、本校から6名の計18名を基本として協議を行っている。各委員の様々な立場からの意見を頂きながら防災管理・防災教育をすすめることで、根拠を持

回数・期日	主な議題
第1回 6/23	防災管理・防災教育の方針の決定
第2回 8/30	防災教育（Ⅰ）、（Ⅱ）の反省、避難訓練・防災教育（Ⅲ）実施案の検討、マニュアルの検討
第3回 11/6	緊急地震速報受信システムを用いた避難訓練及び防災教育（Ⅲ）視察
第4回 12/15	避難訓練及び防災教育（Ⅲ）の反省マニュアルの検討
第5回 2/8	本年度の活動報告と総括 次年度に向けて

って防災教育を展開することができ、実践的・総合的な防災リテラシーの獲得に役立った。各回の期日と主な議題は以下のとおりである。

イ 生徒会内に生徒防災委員会を設立した。他校交流や研修等で防災教育の核として活躍した。今後の防災教育の継続のための活動が期待される。

ウ 防災をテーマにした小論文コンクールを実施した。自治体が作成した資料から地域防災について論じる資料分析型と熊本地震から考える教訓について論じるテーマ型の2題から1題を選択して解答する形で、2、3年生に実施した。防災意識を検証することで日常生活の意識向上が得られた。

エ 防災グッズアイデアコンテストを実施することで、日常生活を防災の視点で見直す機会となった。

オ 安全マップを作成し、防災通信として保護者に配付するなど、防災教育の活動内容を防災通信に纏めて発行することで、学校から家庭に防災教育の波及効果が得られた。



カ 理数コース地学班が科学研究で地震発生のメカニズムについて調べたり、国際コースの中国語、韓国語を履修している生徒がマニュアルの一部を中国語、韓国語に翻訳することを試み学校の特色を生かす取組ができた。

キ 防災教育実施期日と内容は以下のとお

りの実施期日と内容で行った。

期日	内容
(Ⅰ) 6/29	1年：防災に関する基礎知識（講演会） 2年：救急救命 AED 操作実習 3年：クロスロードゲーム研修
(Ⅱ) 9/28	神戸学院大学前林教授講演会 「魂の復興とこれからの備え」
(Ⅲ) 11/16	1年：防消火訓練 2年：避難所開設支援実習 3年：HUG研修
(Ⅳ) 1/23	葛藤事例を用いた思考実験討論型防災倫理 について考える授業

a 緊急地震速報受信システムを使用した避難訓練・防災教育を地域、関係機関と連携して実施することで、実践的な緊張感のある避難訓練を実施することができた。

b 各回の防災教育をとおして、基本的な防災リテラシーとリスクコミュニケーション能力が高まった。

防災教育（Ⅲ）では、1年生は熊本市消防局より消火訓練と防災〇×クイズを、2年生は自治協議会と区役所より非常食調理、段ボールベッド作成、テント設営実習を、3年生は防災士よりHUG研修を実施した。事後アンケートで、各学年高い満足度が得られた。特に2年生では、約25%が地域貢献のボランティアに組みたいと回答した。地域住民との face to face のコミュニケーションが生徒と地域の距離を縮め、知識や技能を獲得したことで、ボランティアの意識が高まった。地域を巻き込んだ防災訓練の一番の成果であった。

c 生徒から「防災通信を公民館に掲示する」や行政の方から「高校生目線の意見がほしい」などの声が上がリ、防災教育に双方向性が出てきた。

ク 生徒防災委員が中心となって防災教育を進めた。また他校との交流や研修会をとおして得られた知見を生徒防災委員が、防災通信や文化祭、地域の祭りなどの機会を利用して、生徒や家庭に広めることができた。

## (2) 課題

ア 小論文コンクールで、論を展開する根拠となる科学的知見の提供や共助に強い日本人の理由、無常観など日本人の心の原点まで考察を深めるための指導が必要である。防災グッズアイデアコンテストでは、取組に温度差が見られた。被災状況の濃淡

が影響していると考えられる。安全マップは生徒の通学エリアが広くカバーできない。

ウ 緊急地震速報受信システムを使用した避難訓練・防災教育についての課題は以下のとおりである。

a 段ボールベッド作成実習で、プライバシーの保護と避難所安全管理の観点から、ベッド周りの壁の高さ妥当性を考えさせたりして、訓練に教育の視点を取り入れるなど工夫の余地が多い。



b 平日での訓練には出来る事に限界もみられたが、土曜日に実施しても、町内に住む生徒は各学年10人前後であり生徒の土地勘が乏しいなど、解決すべき課題は多い。

エ 質を高め対策を加速させるために防災管理と防災教育の担当者は分けるべきである。

オ 取組の継続性や防災教育の日常化を考慮し、授業時数を削らないことや担任に負担がかからないことを重視して取り組んだ。教科学習内容や日頃の教育活動を防災の視点で見直し、さらに防災教育資源の発掘を推進したい。

## 2 被災地支援を通じた体験型防災教育の推進

### (1) 成果

HUG研修により、避難所運営者を疑似体験することで、協力的な避難者としての立ち居振る舞いを身に付けた。共助能力やボランティアへの機運も高まった。

### (2) 課題

創造的復興に寄与する人材育成のために、労働力提供型ではなく解決すべき問題を分析し、企画提案型のボランティアができるような機会の提供に努めなければならない。

## 3 学校安全（防災）アドバイザーの活用

### (1) 成果

専門的、実践的な助言をいただき、防災管理、防災教育の指導の根拠を得ることができた。また、防災教育の質の向上につながり、研修を通して職員が知見を得られ、学校の総合的な防災能力が向上した。

### (2) 課題

今年度ご指導をいただいたことをさらに、組織化・効率化する必要がある。